

徳永貞一郎

徳川吉宗



著者紹介

徳永真一郎（とくなが しんいちろう）

大正3年香川県生まれ。昭和14年毎日新聞社に入社。鳥取支局長、大津支局長、大阪本社学生新聞部長を歴任するかたわら、歴史小説を中心に数々の作品を生み出す。昭和46年びわ湖放送常務取締役役に就任、49年退社。現在、日本文芸家協会、日本ペンクラブ会員、滋賀文学会長。

著書に『影の人・藤堂高虎』（毎日新聞社）、『明智光秀』『家康・十六武将』『石田三成』『幕末閣僚伝』（PHP文庫）など多数がある。

PHP文庫 徳川吉宗

1990年 5 月 15 日 第 1 版 第 1 刷

著 者 徳 永 真 一 郎

発行者 江 口 克 彦

発行所 P H P 研 究 所

東京本部 03-239-6221

〒 102 千代田区三番町 3 番地10

京都本部 075-681-4431

〒 601 京都市南区西九条北ノ内町11

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所

© Shinichiro Tokunaga 1990 Printed in Japan

落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-569-56258-2

徳川吉宗

徳永真一郎

PHP文庫

- 本表紙図柄Ⅱロゼッタ・ストーン（大英博物館蔵）
- 紋章＋装幀基本デザインⅡ上田晃郷

徳川吉宗・目次

徳川吉宗

5

徳川宗春

265

解説 今井敏夫

徳川吉宗

徳川将軍

征夷大將軍という官名が、日本の歴史に現われるのは、奈良時代の養老四年（七二〇）四月、正四位上、多治見真人県守が任命されたのが最初である。

征夷將軍の称号は、征夷持節大使、征夷持節大將軍の別称または略称であった。

蝦夷^{えぞ}征伐は古代以来しばしば行なわれたが、蝦夷はその居住地域によって陸奥方面のものを東夷・日本海方面のものを北狄^{てき}といい、前者の鎮定に向う者を鎮東將軍、後者のそれを鎮狄將軍ともいった。

奈良時代には、多治見県守ののち、藤原宇合、同麻呂、同継縄らが、また平安時代に入ってからは大伴弟麻呂、同家持、紀古佐美らがそれぞれ蝦夷平定の責任者となったが、いずれも征夷將軍とはいわれなかった。

延暦十三年（七九四）大伴弟麻呂が初めて征夷大將軍に任ぜられ、以来、坂上田村麻呂、文屋綿麻呂にこの職号を授けられたが、綿麻呂ののち蝦夷鎮圧が一応終了したので、臨時官たる征夷大將軍という存在も廃絶された。

その後、元暦元年（一一八四）平氏を京都から追った木曾義仲が、征夷大將軍に任ぜられた。もちろん蝦夷征伐とは関係なく、天下の武力を掌^{つかさど}るといふ意味をもっていた。

義仲が琵琶湖畔の粟津ヶ原で敗死したのち、源頼朝が鎌倉に幕府を開いて全国の武力を統

べ、幕府の首長として征夷大將軍に任ぜられんことを請うたが、後白河法皇はこれを許さず、法皇の死んだ四カ月後の建久三年（一一九二）七月、やつと許された。

それ以来、征夷大將軍は武家の棟梁たる地位を象徴するものとして、頼朝の死後も、二代目頼家、三代目実朝と受け継がれたが、承久元年（一二一九）正月二十七日、実朝が鶴岡八幡宮の社前で横死ののちは、四代目から九代目まで、藤原家の公卿や親王を移入した「京將軍」によって受け継がれ、有名無実のものとなった。

そして、武家の棟梁、幕府の首長である「將軍」の実権は、「執権」と称する北条氏の手に移り、初代の時政から十六代守時まで百三十年間つづいた。

元弘三年（一一三三）五月「北条幕府」の打倒に成功した後醍醐天皇は、建武中興第一の功臣として足利尊氏を鎮守府將軍に任じ、護良親王を征夷大將軍に任じたが、親王は二年後に鎌倉の土牢の中で、尊氏の弟直義の手の者に暗殺された。

暦応元年（一一三八）京都に足利幕府を設立した尊氏は、義家の孫源義康の後裔だということとで征夷大將軍に任ぜられ、鎮守府將軍も兼任し、征夷大將軍は十五代義昭まで二百三十五年間受け継がれた。

しかし足利將軍が、幕府の首長たるの地位を確保したのは、九代義尚までの百五十年間で、十代義植以降十四代義栄までは、三好、松永の勢力に擁立されたり、追放されたりで、主体性を失った傀儡將軍であった。

十五代義昭も織田信長によって擁立されたのち追放され、足利幕府の命運は尽きた。

信長は義昭が備後頼朝でまだ幕府を開いているつもりなので征夷大將軍になれず、平氏系であるためその資格もなく官職では右大臣に過ぎず、本能寺の変で横死後、従一位太政大臣を追贈された。

秀吉は、義昭に征夷大將軍をゆずってくれと交渉したが拒否され、従一位関白太政大臣に就任し、足利三代將軍義満以来、武家出身の二代目の太政大臣で満足し、甥の秀次に関白をゆずって太閤を称したが、豊臣家で関白職を占めたのは、二人で十年間に過ぎなかった。

新田源氏の直系を辞任する徳川家康は関ヶ原合戦で勝利をつかみ、豊臣政権を奪取するのに成功したとみるや、二年四ヵ月後の慶長八年（一六〇三）二月、伏見城において勅使勸修寺光豊から征夷大將軍の宣下をうけた。そして同時に右大臣、源氏長者、淳和奨学両院別当に任ぜられ、牛車、兵杖をゆるされた。

朝廷としては、家康に征夷大將軍を宣下したのは足利將軍の後継者とみなし、武家の棟梁として、武家領の土地や人民を支配させることを意味していた。

しかし、家康の意図はもっと大きいものであった。

信長や秀吉は、独自の武家政権をつくることをせず、自ら天皇家体制の組織に入りこむことによって、自己の権力を正当づけようとはかった。

これに対して家康は、自ら征夷大將軍に任ぜられると同時に、独自の武家政権を樹立して、天皇家を軸に組み立てられていた古代的権力体制を完全に自己の権力のもとにおさえこもうと考えたのである。

家康は武家政権の開祖である頼朝を尊敬し、当時の歴史的記録である『吾妻鏡』を愛読していたといわれるが、征夷大將軍の宣下をうけると同時に、統一政権の地位を合法化するため江戸に幕府を開設することを宣言し、將軍を中心とする強力な幕府政治の展開にのり出したのである。

そして全国の大半を幕府と大名領に組みこみ、幕府政治の頂点に立つ將軍は、外交的にも国家を代表し、国内においては大名の施政を監督する権限をにぎった。

そのためには、「禁中並公家諸法度」を制定して、天皇および公家を法的に幕府の統制下におき、国政の大権は幕府に委任された形をとった。

こうして、征夷大將軍としての徳川將軍の地位と権限は絶対的なものになった。

しかも家康は、それから二年後の慶長十年四月、征夷大將軍を息子の秀忠に継がせて、みずからは大御所を称し、征夷大將軍は徳川宗家の当主の世襲にすることを明らかにした。

そして九男義直、十男頼宣、十一男頼房を、それぞれ尾張、紀伊、水戸の領主に配置して、これを御三家と呼び、いつまでも江戸本丸の鎮護者になれと指示し、もし本丸に後継者のない場合は、この御三家の中の、そのときにおける当主の序列に従い相続せよと命じた。

家康が「三男」の秀忠に將軍職をゆずったのは、一番出来のよかった長男信康を、

「武田に通謀している」

という、あらぬ疑いをかけられ、信長にむりやりに切腹させられ、二男秀康は結城晴朝の養嗣子になって他姓を名乗っているという理由に基づくものと考えられる。秀康は、無類の好色

で、梅毒のため鼻が欠け、付け鼻をしていたというから、将軍になれなかった理由も、案外、そんなところにあつたのかもしれない。「付け鼻将軍」では、さ、ま、に、な、ら、な、い、で、は、な、い、か。

しかし、将軍相続会議では、井伊直政、本多忠勝、本多正信、平岩親吉、大久保忠隣の譜代の五重臣のうち、四人までが秀忠を信州上田城の攻略にこだわって、関ヶ原戦に間に合わなかった凡庸な武将と決めつけ、宇都宮城にあつて、北上した家康に対する上杉からの追撃を阻止した秀康を、戦乱後の政権担当に適材だとして強力に推せんした。

そうした中であつて、大久保忠隣だけが

「世を治める者は、文武に秀でた者でなければならぬ」

といつて秀忠を支持し、家康がこれを採用して従順で律義な秀忠を次期将軍に決定したといふ。

これらの重臣は、家康が「百姓制度」によつて定めた老中の列に加わっており、将軍職の決定にあたり、老中たちの意見が大きい影響を持っていたことを物語っている。

桶狭間合戦の翌年から二十年間攻守同盟を結んでいた信長が本能寺の変で倒れて以来、次の天下はわがものと狙っていた家康は、十八年間にわたる待機ののち、やっと手に入れた征夷大將軍（将軍職）を、自分の直系の子孫に万代まで継がせるには、どのような政治組織や制度をつくつたらよいか、知恵をしぼって考え、実行した。慶長六年に、

「源頼朝公以後の代々公方（将軍）の法式にならい、諸家の損益を考えて、徳川幕府より発せられる令書は、これを堅く遵守せよ」

と在府の諸大名に誓約させ、秀忠將軍の權威を強調し、將軍への服従を誓わせたのも、その一つである。

関ヶ原戦のとき、西軍に味方した大名、八十一家四百九十万石を廃絶または減封処分にして、徳川家の自由の地とした。

そして一番気がかりだった淀殿・秀頼母子を大坂夏の陣で自刃させて豊臣氏の残存勢力を根切りにし、翌年の元和二年（一六一六）四月、ホツとした顔で、当時としては珍しい七十五歳の高齢で、あの世へ旅立ったのである。

二代目徳川將軍秀忠は、家康が期待したとおり、律義で従順で、どんな些細なことでも大御所たる家康の指示を仰ぎ、秀忠は江戸に家康は駿府にという二頭政治の弊害におちいることなく、徳川幕府創成期の困難を切り抜けた。

また秀忠の在世中に改易した大名は、徳川一門と譜代で十六名、外様大名二十三名で計三十九名、没収禄高は四百万石におよび、改易將軍の名で呼ばれるほどだった。

こうして徳川幕府の支配体制を確固たるものにし、三代徳川將軍を継いだ息子の家光に、「予は生まれながらの將軍である。不服な者は国許くにもとに帰って、兵を挙げてみよ」

と諸大名の前で大見得がきれるほどの、幕府の基礎は磐石ぶりを見せた。

その家光の少年竹千代時代に、父の秀忠、生母のお江与が弟の国松（のちの忠長）のほうを偏愛し、次期將軍のお鉢が危うく国松のほうへ回りそうになったとき、乳母の春日局が駿府へ飛んで直訴したため、家康の「長男優先」の鶴の一声で阻止されたという一幕があったこと

は、あまりにも有名だ。

これは徳川永久政権を確立するためには、嫡子と庶子の区別をはっきりし、世継ぎ問題をめぐる対立、紛争を未然に防ぐことが、徳川宗家^{II}將軍家の絶対権を確立するために絶対に必要だとする、家康の考えから出たことであることはいうまでもない。

家光は、その家康の考えを継承し、弟の忠長（駿遠甲五十万石）をはじめ、徳川一門、譜代大名二十名、外様大名二十九名を嗣子がないなどの理由で改易し、没収禄高は四百万石におよんだ。

こうして家康、秀忠、家光の三將軍の没収高は合計一千三百万石におよび、全国の総高三千万石の三分の一を徳川宗家で直轄することになり、徳川政権下の領国体制が確立するのである。

このほか、寺社奉行、勘定奉行、町奉行の制度を整備し、鎖国体制を確立して外国貿易を幕府の手で統制、掌握し、島原の乱を平定するなど、家光時代に徳川幕府の支配体制の総仕上げが完成したといえる。

「売家と唐様^{からよう}で書く三代目」という川柳は、どんな家でも三代目でポシヤルという意味だが、徳川將軍家が三代目家光時代に、かえって基礎が固まったということは、家康が手塩にかけて育てた土井利勝、酒井忠勝、松平信綱、阿部忠秋などの少年が、見事に成長し、老中となって家光を補佐し、井伊直孝、保科正之など家康の信任厚かった元老が老中をよく指導したためといえる。

すなわち、大老、老中の制度が確立していたことが、大きな支えとなったことは否定できない。

家光は將軍在職二十九年で四十八歳の壮年で病没し、嫡子家綱がわずか十一歳で征夷大將軍を世襲するが、由井正雪の慶安の変などにもビクともせず、家光時代の威令がゆるぎなく行なわれたのは、家光を補佐した老中たちの生き残り組が健在だったためである。

しかし四代將軍家綱が、延宝八年（一六八〇）五月四十歳で病没し、嗣子がない、ということのため、長男が徳川宗家を相続するという家康の構想は狂い始めた。

家綱の臨終が迫ったとき、「下馬將軍」と呼ばれて、家綱政治を動かしていた大老酒井忠清が、

「鎌倉幕府の例にならって、京都から宮將軍を迎えたらよろしかろう」

と提案し、老中たちは、

「それがよろしかろう」

と付和雷同した。忠清は、北条時政のような執権職につくことを夢見ていたのかもしれない。地下の家康は目をむいて激怒していたことであろう。

このとき、老中堀田正俊がただ一人、

「どうして他から世継ぎを迎えるといわれるのか。全く理屈に合わぬご意見でござる」

と激しく忠清に喰い下がり、天下の正論に忠清はじめ一言もなく、茫然としている間に、正俊は家綱の病床へ走って行き、家綱の弟（家光の四男）の館林十五万石の城主綱吉を後嗣とす

る了解を取りつけ、帰ってみんなに報告した。

三十五歳の綱吉が將軍宣下を受けたのは、同年八月のことである。

中の兄の綱重がすでに病没していたことが幸いして、綱吉は思いがけず將軍の座についたわけである。

綱吉の將軍就任に決定的な役割を果たした堀田正俊は、家光逝去のとき殉死した正盛の子であった。

綱吉は就任すると、大老酒井忠清をしりぞけ、その後釜に堀田正俊をすえた。当然の処置であった。その大老正俊は、これから四年後の貞享元年（一六八四）八月、従弟の若年寄稻葉正休に殿中で刺殺されるのだから、運命は皮肉である。

綱吉は、父の家光が生母の桂昌院に

「しつかり學問をさせて聖賢の道に心を用いるようにせよ」

と命じたために、幼時から儒学の勉強をみっちり仕込まれた結果、異常なまでの學問好きで、大學頭林信篤のために湯島に聖堂を建ててやつたり、近臣にみずから儒学の講義をした。同じ戌歳で十二歳下の柳沢吉保を學問の弟子として寵愛し、吉保はやがて側用人として權力をふるうようになる。

幕臣たちが、「兵革」のことを口にするさえ禁止され、江戸城内に蓄えられた武器はほこりをおかむったままで、ひたすらに元禄時代の太平を謳歌した。

綱吉の唯一の悩みは、子宝に恵まれないことであつた。